第11課　最後の7つの災い

【暗唱聖句】

「主よ、だれがあなたの名を畏れず、たたえずにおられましょうか。聖なる方は、あなただけ。すべての国民が、来て、あなたの前にひれ伏すでしょう。あなたの正しい裁きが明らかになったからです。」黙示録15：4

【日曜日・最後の7つの災いの意味】

15:1 「わたしはまた、天にもう一つの大きな驚くべきしるしを見た。七人の天使が最後の七つの災いを携えていた。これらの災いで、神の怒りがその極みに達するのである」黙示録15：1

最後の災いが来ます。これまでの7つの封印やラッパは、裁きの前兆、裁きの警告でしたが、ついに最後の災いである神様の裁きがやって来ます。神様の怒りが極みに達するのです。この怒りという言葉はスーモスと言って、激しい感情の爆発を意味する言葉です。押さえられない感情を爆発させるようにして裁かれるのです。また、「最後」の7つの災いと書かれてあるので、これまでの封印やラッパのように全時代を網羅する預言ではなく、再臨直前に起こる出来事となります。

　しかし、このような激しい神の激しい怒り前に、ヨハネは驚くべきしるしを見たと言います。これまでの流れから行けば、来るべきものが来たという感じであるはずなのに、ヨハネは驚くべきしるしを見たと言うのです。なぜ、ヨハネは驚いたのでしょう。その怒りのあまりにも激しいことに驚いたのでしょうか。おそらくそう読むのが自然です。ただ、このような激しい最後の怒りの中にも、ヨハネはなおも神の愛を見て驚いたのではないかとも思うのです。

神様は人々を愛しているがゆえに怒るのです。目覚めよと怒るのです。黙示録は裁きを強調しているのではなく、神様の何とか私たちを救おうとされる、必死な愛が示されているのです。最後の裁きはまだ来ていません。だからここを読むものは、バビロンから出よとの最後の神様からのメッセージを受け取るのです。ある牧師は、次にように言っています。

「神は怒るほどに私たちを愛している。これに驚き、心を揺り動かされ、目を覚まされるのである。神の怒りは愛の裏返しとも言えよう。子どもを叱り、懲らしめることが出来ない親がいる。愛がほどほどになっていないかを思う。真剣に怒ると疲れる。そこでほどほどになる。優しい言葉が真実を覆う。その見方からすると神の怒りは異常である。自らが痛み、傷つき、倒れ、そして苦しみにうめくほどに、神は私たちを愛しているのである。」

**「わたしはまた、火が混じったガラスの海のようなものを見た。更に、獣に勝ち、その像に勝ち、またその名の数字に勝った者たちを見た。彼らは神の竪琴を手にして、このガラスの海の岸に立っていた」黙示録15:2**

勝利したものたちが、主とともに天にいる幻は、神の裁きのとき、聖徒たちはそこにいない、あるいは守られるということをあらわしています。

**「この後、わたしが見ていると、天にある証しの幕屋の神殿が開かれた。15:6 そして、この神殿から、七つの災いを携えた七人の天使が出て来た。天使たちは、輝く清い亜麻布の衣を着て、胸に金の帯を締めていた。15:7 そして、四つの生き物の中の一つが、世々限りなく生きておられる神の怒りが盛られた七つの金の鉢を、この七人の天使に渡した。15:8 この神殿は、神の栄光とその力とから立ち上る煙で満たされ、七人の天使の七つの災いが終わるまでは、だれも神殿の中に入ることができなかった」黙示録15：5～8**

ヨハネは幕屋の神殿（聖所）が開かれ、七人の天使が神様の怒りが盛られた七つの金の鉢をもって出てきます。この鉢が注がれるたびに、地上では災いが起こります。なお、「だれも神殿（聖所）の中に入ることができなかった」とは、恩恵期間の終了を現わしています。

【月曜日・最後の災いが注がれる】

「また、わたしは大きな声が神殿から出て、七人の天使にこう言うのを聞いた。「行って、七つの鉢に盛られた神の怒りを地上に注ぎなさい。」黙示録16:1

最後の七つの災いは、出エジプトに注がれた災いを反映しています。出エジプトは乳と蜜が流れるカナンに向けて脱出しました。それ先立って彼らを奴隷として苦しめたエジプトに災いが臨みました。このことはこれから起こる最終時代の出来事を実は霊的に予表しており、同じことが起こるのです。私たちは罪の奴隷状態から解放され天のカナンに向けて脱出するのです。それに先立ち、最後の災いがこの地に臨むのです。これは黙示録の6章10節に出てきた殉教者たちの叫び、「真実で聖なる主よ、いつまで裁きを行わず、地に住む者にわたしたちの血の復讐をなさらないのですか」に対するその応答です。だから、出エジプトのときもそうであったように、神の民には災いが及びません。

「そこで、第一の天使が出て行って、その鉢の中身を地上に注ぐと、獣の刻印を押されている人間たち、また、獣の像を礼拝する者たちに悪性のはれ物ができた」16:2

第一の鉢の中身が地上に注がれると、獣の刻印を押されている人間たち、また、獣の像を礼拝する者たちに悪性のはれ物ができます。そのはれ物は、まさに獣を拝んでいることの外面的な印となるわけです。

「第二の天使が、その鉢の中身を海に注ぐと、海は死人の血のようになって、その中の生き物はすべて死んでしまった。16:4 第三の天使が、その鉢の中身を川と水の源に注ぐと、水は血になった」創世記16:3、4

次に、海や川の水が血のようになります。これは、殉教者たちが流した血の報復を表しているのかもしれません。水は命の源ですから、それが飲めなくなることは大変なことです。海や川の生物はすべて死に絶えてしまいます。このような悪性のはれ物や水が血に変わるという現象は、出エジプトの災いと類似しています。

「第四の天使が、その鉢の中身を太陽に注ぐと、太陽は人間を火で焼くことを許された」。16:8

「第五の天使が、その鉢の中身を獣の王座に注ぐと、獣が支配する国は闇に覆われた」16：10

四番目に太陽が暑くなります。温暖化現象はその前兆なのでしょうか。そして、5番目に暗い闇が地を覆います。しかも、偽ものの光を掲げていた「獣の王座に鉢の中身が注がれ、獣が支配する国のみが闇に覆われ」るのです。もはや偽の教え、背教した教会には光はないのです。しかし、それでも彼らは「苦痛とはれ物のゆえに天の神を冒涜し、その行いを悔い改めようとはしな」（黙示録16:11）いのです。

【火曜日・ユーフラテス川の水がかれる】

「第六の天使が、その鉢の中身を大きな川、ユーフラテスに注ぐと、川の水がかれて、日の出る方角から来る王たちの道ができた」黙示録16:12

第六の天使が鉢をユーフラテス川に注ぎます。すると、日の出る方角から来る王たちの道を作るために、川の水が枯れてしまったとあります。これはいったい何を意味するのでしょうか。川の水が枯れるといいますと、モーセがエジプトを脱出するのとき、紅海が真っ二つに分かれました。また、ヨシュアたちがカナンに入るときも、ヨルダン川がせき止められました。川が枯れるという現象は、旧約聖書ではしばしば、救いのみ業と関連して描かれています。また、このユーフラテス川を挟んで、かつてバビロン帝国がありました。記録によりますとこの川の水をせき止めて、ペルシャ軍が侵入し、町は滅びてしまいます。ですから、川の水が枯れるとは、滅亡の前兆だとも言えます。つまり、この第六の鉢が注がれたとき、川の水が枯れるとは、ついに救いの日が来る、そして同時に滅びのときがくるということを表していると思われます。

【水曜日・サタンの最後の大いなる惑わし】

「第六の天使が、その鉢の中身を大きな川、ユーフラテスに注ぐと、川の水がかれて、日の出る方角から来る王たちの道ができた」黙示録16:12

なぜ、ユーフラテスの川の水が枯れるのかというと、それは日の出る方角から来る王たちの道を作るためでした。実際にバビロンを征服したキュロスとその軍勢は東からやってきましたが、日の出る方角（東）は、聖書では神様の方角です。つまり、イエス・キリストと天使たちが最後の戦いのためにやってこられるということを象徴的に表しています。

「わたしはまた、竜の口から、獣の口から、そして、偽預言者の口から、蛙のような汚れた三つの霊が出て来るのを見た。16:14 これはしるしを行う悪霊どもの霊であって、全世界の王たちのところへ出て行った。それは、全能者である神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。見よ、わたしは盗人のように来る。裸で歩くのを見られて恥をかかないように、目を覚まし、衣を身に着けている人は幸いである。――16:16 汚れた霊どもは、ヘブライ語で「ハルマゲドン」と呼ばれる所に、王たちを集めた」黙示録16：13～16

神の軍勢に対し、悪の軍勢も立ち上がり、全世界からサタンに従う悪の軍勢が呼び集められます。さて、ここで注目したい４つのポイントがあります。一つ目は誰が召集をかけるのか。二つ目は誰を招集するのか。三番目はどのように召集するのか。そして最後にどこに召集するのかということです。

まず、最初の誰がということですが、１３節を見ますと、「竜の口から、獣の口から、そして、偽預言者の口から、蛙のような汚れた三つの霊が出て来るのを見た」とあります。竜は悪魔、獣はこの地上において大きな権力を持つ反キリスト、我々はローマ・法王ととりますが、そして偽預言者は偽の宗教組織。悪の三位一体であり、それは政治的、軍事的な力というより、その背後にある悪霊的な力をもつ存在が一つところに集めるのです。

では、二つ目にこの悪霊の力を受けた存在は、誰を招集するのかということですが、全世界の王とあります。例えば、ダニエル書にペルシャの君という表現で、天使ミカエルの働きを邪魔する、かなり強力な悪霊の存在が描かれています。おそらくは、日本においても、いや世界中に悪霊が散らばり、その国や地域を支配しているのだろうと推測されます。その悪霊たちが召集されるということでしょうか。つまり、この地上に存在する悪の全勢力が一箇所に召集される。そして、神の勢力に対し、全総力をあげて戦いを挑んでくるということです。そして、王が召集されるということは、その国のものたちもやがては呼び出されることになります。それぞれの国において、神ではなく、サタンに従う人間たちも、悪の力によって、ぐいぐいと引き寄せられていく。これが、ハルマゲドンのもう一つの重要な側面ではないかと思われます。

三番目のどのようにしてかということに関しては、心霊術のようなしるしによる惑わしや、罪の誘惑によってでしょう。それは日ごとに強まり、目に見えない強力な力によって、ぐいぐいと悪の側に引き寄せられているのを感じます。悪魔はできれば神の子さえ惑わそうとするとさえ聖書は言うのです。そして、最後に悪の勢力はハルマゲドンと呼ばれるところに集められます。

【木曜日・ハルマゲドンの戦いのために集結する】

ハルマゲドンという言葉は二つの言葉からなっていて、一つはハル、これは山とか丘という意味です。もう一つはマゲドン、これはメギドという地名からの派生語です。ですから、ハルマゲドンとは、メギドの山という意味になります。メギドにある山といえばカルメル山です。カルメル山といえば、かつて預言者エリヤが偽預言者と戦った場所です。エリヤ一人に対し、偽預言者がぞくぞくとこのカルメル山に集結してきました。その数８５０人。まさにハルマゲドンのように、一箇所に呼び集められるのです。そして、そこで行われた戦いとは、天から火を降らせるという、まさに霊の戦いでした。そのことを考えるとき、ハルマゲドンの戦いも、霊的戦いだということを推測することができます。神の軍勢と悪魔の軍勢が戦うのだから、当然、そういいことになるわけです。悪の勢力がハルマゲドンに終結した、その後で、キリストは天の軍勢を従えて、天から地上に下ってきます。この光景は１９章に登場します。

「わたしはまた、あの獣と、地上の王たちとその軍勢とが、馬に乗っている方とその軍勢に対して戦うために、集まっているのを見た」黙示録19:19

１９章の１１節からはキリストの再臨が描かれています。ですから、この戦いはキリストの再臨とも重なってきます。悪魔はキリストの再臨が近いことがわかっていて、だから、自分に従う全勢力を、キリストの再臨前に集結させ、その戦いに備えるのです。村上良夫先生は次のように、解説しています。

「大事なことは、この戦いはすでに始まっているということです。目に見えなくともすでに、いいえ、常に、善と悪の勢力がからみあいながら、歴史は進行している。キリストの軍隊とサタンの軍隊は、招集され進軍しつつある。善の力と悪の力が一人ひとりに働きかけ、こちらの旗の下に来るようにと呼びかけている。ですから、私たちは毎日、二つの勢力のどちらかにますます近づいていると言えます。今はそういう時代です。それぞれの軍隊が進軍している。そして、しだいにそれがはっきりと分かれ、はっきりしてきます」と。

エリヤは偽預言者に勝利したとき、どっちつかずの多くの民に、一喝してこう言いました。「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え。」と。まさにこれこそ、ハルマゲドンのメッセージです。私たちは悪のいかなる惑わしや罪の誘惑にもくっせず、徹底的に抵抗し、Ｎｏと言うのです。そして、悪の陣営ではない、もう一つの陣営、すなわち神の陣営に完全に入ることです。しかし、肉の力では、悪の力に抵抗することはできません。私たちにできることは、ひたすら天地万物を創られた神を信じ、この神と共にいる時間を何よりも大切にすることです。そして、目に見える兄弟姉妹を愛しあうことです。そうするならば、悪魔は私たちにふれることはできません。神の国に自らを置くことによって、悪魔にすきを与えないように、共に注意していきたいと思います